

Title	「ほとんど」の副詞用法
Author(s)	大倉, 美和子
Citation	大阪外国語大学学報. 70(1) p.55-p.70
Issue Date	1985-11-30
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81062">https://hdl.handle.net/11094/81062</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 「ほとんど」の副詞用法

大 倉 美 和 子

## Adverbial Uses of 'Hotondo'

Miwako OKURA

'Hotondo' is a word to express 'a degree very near to the extreme limit' when used as an adverb, and 'a quantity very near to the total quantity' when used as a noun. It always co-occurs with an element, explicit or implicit, that indicates the extreme limit or the total quantity.

When the implicit element follows 'Hotondo', it represents the extreme limit and when it precedes 'Hotondo', it represents the total quantity.

The followings are the implicit elements representing the extreme limit; 1) object of similarity, 2) fully accomplished state of an action or complete change of the state of an agent.

Also in a negative sentence, 'Hotondo' is connected with the extreme limit expressed by 'Nai' (negation of existence) or the total quantity.

### 0. はじめに

「ほとんど」は文脈依存度の極めて高い語である。何らかの基準値への接近の度合が非常に大きいことを表すのをその機能としているので、「ほとんど」が表れる文中には、必ず何らかの基準値が明示的にあるいは暗示的に示されている。「ほとんど」はその基準値と結び付くことによって、文中での存在を可能にし、また、語として持つ意味（実質的概念もしくは情報内容）を表現することができるのである。従って、「非常に」「かなり」など、相対的な意味をもつ形容詞と共起して形容詞の表す意味の度合を限定することによりはじめてその実質的概念が語の意味として表出される語と同様に程度副詞の一種として位置づけられてきた。また、程度副詞の中のある種のもの、「少し・だいぶ」が、程度を表す場合と数量を表す場合があることも論じられてきた（新川1979, 仁田1983 a 等）ことだが、「ほとんど」についても同様のことが言える。とりわけ、「少し」「だいぶ」などがある文の中で、程度を表すのか、数量を表すのかという点については、共起する動詞の性質との結び付きで判断することができるという論もあれば（たとえば仁田 1983a), 花井1980のように、「量を表わす程度副詞はすべて文脈の表す意味と関係があ」るのであって、

「動詞の持つ性質と直接にはかかわらない」とする立場もある。考えてみれば、動詞の性質との結び付きに語の意味の決定を求めることも文脈に依存していることには変わりがなく、その意味では、両者とも「文脈依存」という共通の主張をしているわけである。問題はむしろ文脈依存というときの「文脈」の具体的概念が何であるかということにあり、それが明らかにされない限り、何をもって「文脈」とみるかで意見の分かれるところとなる。たとえば、「ほとんど」についていえば、先に、「基準値への接近の度合いが非常に大きいことを示す」と述べたが、この基準値こそが、「ほとんど」の文中での働きを決定するのであるから、「ほとんど」の場合の文脈依存とは、基準値依存であるということができよう。

ところが、基準値の決定自体がむずかしい場合が実際の使用の場では極めて多い。つまり、基準値が文中に言語形式によって明示的にしめされていない場合には、文中の他の成分の中にその基準値に該当するものを推定しなければならないし、また、基準値を示すと見なし得る語が文中に存在する場合でも、文の意味の多義性が避けられないものがある。例えば、

- ① ドイツ語としては極く日常的な語も、日本の医者の手にかかるほとんど学術用語同然の扱いを受けた。(甘え5)

の例では、

- ①-a. 日常的な語も(その)ほとんど(全部が)学術用語同然の扱いを受けた。  
①-b. 日常的な語も学術用語とほとんど同然の扱いを受けた。

のように、a、bの意味を表現しうる。

このようなとき、文の意味解釈をめぐる、どのような条件下で一つの意味が選択されるのか、そしてその際に「ほとんど」は文中のどの要素と結びつくのか、すなわち、それぞれの意味解釈に結び付く「ほとんど」の構文的特徴を明らかにしない限り、「ほとんど」が文脈依存度の高い語であるということの実態に迫ることができないと考え、本稿では「ほとんど」が、文中のどの要素と結び付いてその機能を発揮するのか、そして、それぞれの意味の「ほとんど」が表れる文にはどのような構文的特徴があるのかを探ってみようとするものである。文の多義性が問題になるのは、上の例で見たように、「ほとんど」の副詞用法の場合なので、副詞用法についての考察を行うこととするが、その前に、「ほとんど」の用法の全体像を整理してみる。

## 1. 「ほとんど」の二つの用法

「ほとんど」の用法は、それが文中で担う意味の面から考えたとき、二つに大別される。

一つは、「程度」を表すとみなされている用法で、

- ② 中産階級以上のメキシコ人の大半、ほとんど百パーセントが、欧米系かあるいはヨーロッパの血が体内に流れている人たちである。(ビバ217)  
③ 電話線、電線の切断はほとんど毎夜のことであった。(町164)  
④ 彼女は憲一についてほとんど無知であることに気づいた。(ゼロ31)

- ⑤ そんなにも交通困難な、冬期となればほとんど不可能な高寒な村に、いったいどうして、誰がかくも見事な教会を作ったものか、(情熱171)
- ⑥ 人間の寿命にくらべると、植物の種子は、ほとんど永遠の生命だな。(山285)
- ⑦ 「道路からの断崖の高さは？」「二十五メートルくらいです。ほとんど垂直に近い。……」(渦397)
- ⑧ 来太は、教授の私的指導を受けるために週二回ずつ片町坂の家へ通っていたが、持ち前の明るい無邪気な性質から、ほとんど家族の一人のような待遇を受けていた。(艶書300)
- ⑨ そこは川の迂回点で、大量の石をなんと築きあげても崩れてしまう難所だった。今はその六回目の工事がほとんど完成しかかっている。(花109)
- ⑩ もうそのときには私の眼の前には、ほとんど原始林の無気味さで繁茂する巨大な植物が立ちはだかり、(町17)
- ⑪ 「おはようございます」という私のあいさつに対して反応を示した人の方が少なく、その中でも、キチンとあいさつをし返すという反応はほとんどなかった。(生態67)

に見られる「ほとんど」がそれである。

もう一つは、

- ⑫ 村上社長は、この四、五年来矢つぎ早に人生訓や経営訓みたいな本を出版し、そのほとんどがベストセラーになっていた。(雑草58)
- ⑬ 東京・京橋の東京国立近代美術館フィルムセンターの五階倉庫から出火して、同センターが所蔵している外国映画約三百本のほとんどが焼失、(毎日11/09/84)
- ⑭ 四十数名のほとんどの人達が私のあいさつに反応してくれたのである。(生態65)
- ⑮ 金沢から汽車に乗り、禎子は和倉温泉に向った。このローカル線も、正月客でいっぱいであった。ほとんどの客が和倉温泉に向うらしいのである。(ゼロ359)
- ⑯ 約七千五百人の人々は、ほとんどが半砂漠の黄土色の世界にすわり込み、ひたすら食糧を待っている。(毎日25/11/84)
- ⑰ その工務店の見積書は「……(中略)……」というように、ほとんどを「一式」で済ませてあった。(毎日29/10/84)

に見られる数量を表す用法である。

第一の用法は、程度副詞の中に位置づけられている「ほとんど」の副詞用法であるが、「ほとんど」を含む概略表現の副詞が、程度副詞の中では特殊な存在であることを、花井1980が指摘した。花井は、「概略表現副詞群が修飾する語には確認されたあるレベル、またはある特定の規定された概念、基準値が要求される」と述べ、『あの学校はほとんどこわれている』の例をあげて、ここに表れた「ほとんど」を「完全に『こわれる』という極限的な状況に対してどのくらい近づいているのかの近づきの程度を」「修飾したもの」と説明する。一方、工藤1983は、「ほとんど」を「ほぼ・だいたい・おおむね・おおよそ」とともに概括量副詞として扱っており、「非常に美し

い」「すこし大きい」の「非常に・すこし」などのいわゆる程度副詞の中には含めていない。「ほとんど等しい」「ほとんど満員だ」における「ほとんど」の用法を「非相対的な形容詞と共に、意味的にも、その非相対的な（点的な）状態への近づきの程度を表す」ものとして、一般の程度副詞から区別したが、この用法の「ほとんど」については「極限的な程度を表す特殊な程度副詞」とみなしうる可能性を示している<sup>(注1)</sup>。

これらの定義に従って、ここでは一応、副詞用法の「ほとんど」を、「極限的状况に極めて接近した程度を表す」ものと規定しておく。そして、「ほとんど」の意味の発現に不可欠な要素である基準値はこの極限状况を示す語によって設定される。「ほとんど」に下接する語がこの機能をはたす。これらの下接語は、②～⑪の例で明らかのように、品詞の別を問わない。その語彙的意味として極限状况を表す概念を含んでいるものであればよい。

第二の数量を表す用法は、「ほとんど」が前後に「の・を・が(は)」などの助詞を伴っている。この場合には、「大部分・多く・すべて・すこし」などの語と同様に、「ほとんど」は数量の多寡についての意味を表現しているので、「ほとんど」の副詞用法で規定した「極限状况への接近の程度を表す」という規定を「全体数・全体量に極めて近い数量を表す」というふうに読みかえる必要がある。この用法の「ほとんど」の場合には、基準値は全体量・全体数（以下「総量」とする）を提示する語によって設定される。「……のほとんど（は・が・を……）」「 $\emptyset$ ほとんど（は・が・を……）」の構文で表れるときには、総量は「ほとんど」の先行語が提示するものの数と等しい。

「ほとんどの……」の構文では、総量は文中の語によっては示されず、暗示的に総量の存在が認識できるのみである。「ほとんどのA」のA部分は、何についての数量であるのかを示すために機能しているので、「ほとんど」によってとりたてられた数量とAの量が等しいという関係にある。⑭の総量は「四十数名」であるが、「ほとんどの人」の「人」は四十数名より少数のはずである。

上に挙げた⑪～⑬の例は、「ほとんど」のそれぞれの用法の典型的なものであるが、次のようにどちらの用法とも解釈しうる「ほとんど」がある。

上に挙げた⑩～⑭の例は、「ほとんど」のそれぞれの用法の典型的なものであるが、次のような「ほとんど」がある。

⑮ 本多が、新任早々、すべての仕事をほとんど投げうって、憲一の行方を探すことに、一生懸命になったのは、……（ゼロ271）

⑯ エスパーニャ本国自体が新大陸の発見と搾取に熱をあげはじめ、これらの島々は地中海の水のおもてにほとんど放棄されてしまった。（情熱199-200）

いずれも形態的には副詞用法の「ほとんど」の例であるが、程度をあらわしているか、数量を表しているか既断がむずかしい。また、次の文では「ほとんど」は、むしろ数量を表していると言える。

⑰ 北陸地方に工場をもっている会社は、ほとんど東京に本社がありますから、（ゼロ8）

⑱ 世界中の現代の作典家のスコアでは、典の解説や表情などの全てが、ほとんど自国語で

書かれている。(楽譜105)

程度を表す用法と量を表す用法が重なり合っている語に「すこし・かなり・だいぶ」などがあることは既に論じられてきた。たとえば、「すこし」について、仁田 1983 a, 花井1980でその用法の重なりをどう解釈しているかを見てみると、仁田は、程度の副詞であるか、数量の副詞であるかを動詞との関わりで説明している。すなわち、主体の運動を表す動詞と共起するときには数量を、状態を表す動詞および主体の状態の変動を表す動詞と共起するときには程度を表すとする。

「御飯ヲ少シ食ベタ」や「彼は私の二の腕をつまんで少し笑い……」では量を、「夫も、いまはすこし狼狽していた」では程度を表すと見る。一方、花井1980が「量を表わす程度副詞はすべて文脈の表わす意味と関係がある」るのであって、動詞の持つ性質と直接にはかかわらない」と述べていることは、先に見た通りだが、「つばが少しこわれた」の例を挙げて、「『少し』は、つばのこわれた状態を修飾している場合とたくさんのつばの中のいくつかの量を表している場合とがあるが、それは純粋に文の意味にかかわってくる問題であって」「この場合は、数量の概念が文脈中に存在しさえすればよい」と考えている。たしかに、仁田が、主体の状態変動の動詞として挙げた語群中に含まれている「枯れる」「濡れる」について考えてみると、

㊦ 庭の木が少し枯れている。

は、「少し」は数量を表すとみる解釈も可能である。

「ほとんど」の場合にも、こうした曖昧性がついてまわる。

㊧ 庭の木がほとんど枯れている。

の「ほとんど」が数量を表している可能性を否定することはできない。また、

㊨ 今朝洗濯した服はほとんど濡れている。

では、むしろ数量を表していると見るべきであろう。

ただ、「ほとんど」の表れる文には何らかの基準値があるという前提がある。特に、副詞用法の「ほとんど」はその情報内容としては、極限状況への接近の程度が極めて大きいことを示すにすぎない。つまり、「ほとんど」が表れるその同一文中に基準値としてその極限状況を示す言語形式の存在を得てはじめてその概念が意味を表現するという性質を持っている。いかに、この基準値への依存度が高いかを考えると、例えば、「非常に美しい」や「少し大きい」の「非常に・少し」は「美しさ・大きさ」の程度を限定するために用いられているのであり、「美しい」や「大きい」の意味の実現に何らの限定を加えるものでもない。ところが、「ほとんど無知だ」「ほとんど不可能だ」では、「ほとんど」は「無知さ・不可能さ」の程度そのものを限定しているのではなく、「無知だ・不可能だ」という極限状況を示す語の意味が完全には実現しないよう限定を加えるというのがその機能である。「非常に・少し」と「ほとんど」の、後続語との関係に見られるちがいを図示するならば「非常に・すこし」⇔「美しい・大きい」, 「ほとんど」→「無知だ・不可能だ」のように表すことができようか。前者の関係が相互依存的なのに対し、「ほとんど」は一方的に極限状況設定語すなわち基準値指示語に向かっており、それだけ極限状況設定語への依存度

が高いわけである。そこで、この基準値を手がかりにして、「ほとんど」の文中での働きを探っていくことにする。

## 2. 副詞用法の「ほとんど」

「ほとんど」が副詞として文の成分と関わる時、基準値を示す言語形式が文中に明示的である場合(②～⑨⑪に該当)と必ずしもそうでない場合(⑩や⑬⑭)のあることを既に例で見た。基準値が明示的である場合には、「ほとんど」は、それ自体が文の述部と直接に結び付くことはなく、むしろ基準値に該当する語(あるいは句)が述部と深く関わっていると考えられる。一方、基準値を示す言語形式が文中にないにもかかわらず、「ほとんど」がその実質的概念「極限状況への極めて接近した程度」を表現することも数多く見られることから、副詞としての「ほとんど」が文の述部と直接に深く結び付いている場合があることも無視できない。この場合には、「ほとんど」が構文上のどのレベルで述部と関わっているかも視野に入れつつ、基準値設定のルールを探る必要がある。ここでは、考察の手順として、肯定文中の「ほとんど」と否定文中の「ほとんど」に分けてそれぞれの場合の基準値を整理しつつ、その基準値がどの構文レベルに関わっているかを見ていくことにする。

### 2-1. 肯定文に表れる「ほとんど」

#### 2.1.1. 基準値が明示的な場合

肯定文中に「ほとんど」が表れる場合の構文的特徴は、基準値指示語すなわち極限状況を示す語(以下極限状況設定語とする)と同一文中に表れること、さらに、それが「ほとんど」に下接していることである。次の文でそのことは明らかである。

⑳ だいたい子供番組は毎日六、七本はテレビに放映されております。それを小高さんはほとんど毎日ぜんぶ見たうえでわたしどもに感想や助言を言われるのですから(渦415)

ここには極限状況設定語と想定しうる語が二つ(『毎日』と『ぜんぶ』)ある。しかし、「ほとんど」が『毎日』と結び付いていることは、

㉑' ……それを小高さんはほとんどぜんぶ毎日見たうえで……

と比べてみれば明らかであろう。基準値としての優先順位は、「ほとんど」に下接する極限状況設定語のほうが高いということであろう。

基準値になりうる極限状況設定語をその意味により分類してみると、数量(時間量を含む)、頻度、位置を表す語、ある状態の上限・下限を表す語であることが分かる。以下にその例を挙げしてみる。

#### (1) 数量に関わる極限状況設定語

数量の概念の中には主体や対象の数量、行為の遂行に必要とされる時間量や空間量が含まれる。

㉒ ワーグナーのスコアは、ほとんど全てがドイツ語で書かれているし、(楽譜104)

- ㉓ かえってくる返答は、ほとんど十に十は、「そこの公園（あるいは小公園）へ行けばいいではないか」というものである。（日々37）
- ㉔ ほとんど全軍をひっさげて、輝虎が信濃へ進発すると同時に、（艶書171）
- ㉕ この戦いはほとんど一昼夜つづき、（町160）
- ㉖ 空は快晴であたたかく、ほとんど一日中ベランダに下て下の庭で立ち働いている植木屋の仕事を見ながら読書。（オリ180）
- ㉗ 補筆はその終わりの部分だけでなく最初からほとんど全体に及んでいて手直しのあとが著しい。（国語）

㉒～㉔は、主体と対象の数量を表す文成分に、㉕㉖は時間量を表す成分に、㉗は空間量を表す成分にそれぞれ「ほとんど」が結び付いた例である。

次のようなものも一種の極限状況設定語とみなしうる。

- ㉘ 夫は勘太、直二郎が五歳ほどのときいちど会ったことがある。……（中略）……以来殆ど二十年ぶりの再会であるが、（艶書122）
- ㉙ 湯治宿にも客は少なく、まだ宵のくちだというのにほとんど半分は雨戸を閉していた、（艶書57）

「二十年ぶり」「半分」の示す時間量，数量の値が限界値として設定されている。

## (2) 頻度に関わる極限状況設定語

- ㉚ 私たちは……（中略）……図書館でも研究所でもほとんどいつも一緒でした。（町203）
- ㉛ 大学へ通勤する途中、バス停がこの広場にあるので、ほとんど毎日私はこの広場を通るのだが、（ああ167）

「毎夜」「毎日」の類は、仁田 1983 a では時間関係の副詞として位置づけられており、頻度の副詞からは区別されているのだが（「ほとんど毎日少なくとも二回この広場を通る」のような文が可能なので）、ここでは、「たえず・ずっと」など持続性を持った時間量とのちがいを考慮して、一応頻度を表す語としておく。

## (3) 空間位置に関わる極限状況設定語

- ㉜ 室田氏は、近くに自動車の音がしたことも気づかず、断崖のほとんど突端に突っ立って、石のように動かなかった。（ゼロ384）
- ㉝ 鋭い音をたてて屋根の角に鳴る湿った風の音が、もうほとんど頭の真上で聞こえた。（町71）

## (4) 上限・下限を示す言語形式による基準値

この分類は、上記のような意味による分類ではなく、特定の言語形式によってある状態の上限



あるいは下限が基準値として設定されているものである。この中には④⑤の接頭辞「無」「不」や「だけ」「…きり」の類が含まれる<sup>(注2)</sup>。

③④ 妹は赤ん坊の時から殆ど祖母の手だけで育った児ですから、(小僧39)

③⑤ 脳死後も一日につき十万円以上つく各種治療が続けられ看護婦もほとんど付ききりだった。(毎日23/06/84)

③⑥ 地方の農民にとって、このノパールはほとんど唯一の栄養源である。(ビバ8)

(5) 「似かよい」の対象を基準値とするもの<sup>(注3)</sup>

(4)の場合と同様に「ほとんど」の後続部分に置かれた特定の言語形式によって示される状態、ことから、時などがこのグループに含まれる。

③⑦ お幸が去るのとほとんど同時に、若い家士が走って来て、(朝顔174)

③⑧ 出ていった小姓とほとんど入れ違いに、(朝顔102)

③⑨ くやみとくやしさは本来同根で、その意味するところはほとんど同じである……(甘え18)

④⑩ 歴史は今日でこそ史書を読むこととほとんど同義のものになってしまっているけれども、(オリ193)

この分類に入るものに次の「よう・そう・みたい・といってもよい」など文末表現と共起する「ほとんど」がある。この場合には、これら文末表現に前置される部分が極限的状态として設定されていると考えられる。

④① 「たのむ」と云い捨てて甲子雄は女の腕をとり、ほとんどひき立てるように廊下をまがっていった。(朝顔166)

④② 彼はほぼんど声に出しそうにして、ひとりごちた。(町244)

④③ 近頃はニコラスはほとんど引退みたいなものなので、(オリ39)

④④ ほとんど父親不在といってよい状態が今日ふつうになっている……(甘え187)

④⑤ 岡林氏の賞めたものはほとんどといっていいくらい、高い視聴率をかせいでいる。(渦282)

④⑥ 湿度がほとんど零に近く、ギター作り屋さんはかせぎどきだという。(オリ363)

工藤1983は、先に見たように、「ほとんど等しい」の「ほとんど」を「極限的な程度を表す特殊な程度副詞とみなしうる」可能性を提起しているが、「その場合は更に、『まるで・あたかも・ちょうど・いかにも・さも』など、比況と呼応する副詞とされているものも、似かよいの程度を極限的に限定する特殊な程度副詞とみなすことになるだろう。『ほとんど罪人のような扱い』『少々馬のような顔』『非常に学生らしい態度』などとの関連の中に位置づけられそうだからである。」との見通しを述べている。「ほとんど」については、上の例に見られるとおり、「よう・そう・みたい・といってもよい」などの文末表現と共起する「ほとんど」は量的にも多く、工藤の見通し

を裏付けている。こうした用法から見て、「ほとんど」は述べられること一事柄的側面一のレベルだけにとどまらず、述べ方<sup>(註4)</sup>のレベルでも作用する語というふうに認定できる。程度表現がもともと持っている‘話者の主観的判断’の側面を示すものと言える。ただし、「ほとんど」の場合の主観的判断のおよぶ範囲は、事柄の実現のされ方のレベルに止まっており、事柄全体について話者の評価のレベル（陳述的側面）にまで立ち到ってはいないようだ。例えば、㉞の文は「幸いにも／あいにく『お幸が去るのとほとんど同時に、家士が走って来て、』」のように「幸いにも・あいにく」と共起しても、「ほとんど同時に」の結合関係には何の変化もない。このことは、㉑の「完成しかかっている」や次に見る「ほとんど」の用法にも共通することである。

(6) 事柄実現の完遂状態を基準値とするもの

- ㉞ その時は既に三日も餌にありつかず、疲労から殆ど昏倒するばかりになっていたが、  
(小僧176-177)

このような将来性を表す場合の基準値は、意味的に「似かよい」の対象というよりは、事柄実現の完遂状態ということになるだろう。この用法の「ほとんど」は、アスペクトの層で作用する文末表現と結び付く。この点が「まるで・あたかも・いかにも」などと異なるところである。

「ほとんど」が、もう少しで完全に実現される程度にまで、動作や状態変化が進んでいることを示しているのに対し、上述の語群は、実際には事態発生に向かって動いていない状況でも用いられるからである。この場合には、「ほとんど」が結び付く基準値として「……かかる（かける）」「……（する）ばかり」といった言語形式に前置される動詞の意味が完全に実現した状況が設定されている。「ほとんど」が結び付くのが「……かかる（かける）」の類の言語形式であることは、

㊦ ×彼はその事故でほとんど死んだ。

㊧ 彼はその事故でほとんど死にかかった。

が示している。動作・変化の終結点が明確な動詞であっても、動詞単独で「ほとんど」と結び付くものと結び付かないものがある。「完成する」は前者の例、「死ぬ」は後者の例で、「……かかる」との共起によってのみ「ほとんど」と結び付くことができる。これは、「すっかり」の、動詞との共起関係に相通ずる「ほとんど」の性質であろう<sup>(註5)</sup>。

(6)の用法の場合、「ほとんど」の基準値はある種の言語形式によってその存在が認識されるとはいえ、(1)の場合に比べると、基準値としてはかなり暗示的なものに移行しつつあると言えよう。

2-1-2. 基準値が明示的でない場合

2-1-1で見たように、「ほとんど」は文の事柄的側面と述べ方の側面の両方で作用する用法を持つ語である。このように多様な側きを見せる語であるだけに、基準値が明示的でない場合には、文の意味解釈に曖昧さが持ち込まれるのも当然といえるかもしれない。しかしながら、その中でも何らかの基準値に依拠して、私たちは意味解釈を行っているはずである。

まず、前節の(5)に挙げた「似かよい」の対象と、(6)に挙げた事柄実現の完遂状態が暗示的な基準値として設定されている例から見てみよう。前者の例には⑩の「無気味さ」も含まれるが、次のような例がある。

④⑧ 現在の日本の国土はほとんど維新当時の狭さになった、(艶書318)

④⑨ 富にとって僕の名は殆ど凶事を意味していたに違いない。(小僧18)

事柄実現の完遂度が基準値として設定されていると思われるものに、

⑤⑩ 伊兵衛は、ほとんど感歎しながら、なぎさの舌鋒を聞いていた。(艶書201)

⑤⑪ 多田がどのように考え、なにを意志してみても、それとは全く無縁のところ、ほとんど独立して、彼の肉体が疲れ、衰え、滅びに向っている……(町225)

⑤⑫ たまさかの手紙と訪客を除いて、日本での日常とほとんど隔絶したかかる生活を送っていると、(オリ155)

⑤⑬ クロサワは、メキシコの学生の間ではほとんど神格化されていて、(ビバ114)

などの例がある。

これらの用法の「ほとんど」に下接する述部表れる語の特徴は、「似かよい」の対象が基準値になる場合は主体の状態を、事柄実現の完遂状態の場合には、主体の状態変化や動きを、その語彙的意味として持っているものということになる。上記以外にも前者の例として「ほとんど直接して」「ほとんど夜」「ほとんど涙声で」「ほとんど自動的に」などが、後者の例の動詞として「消える・姿を消す・影をひそめる・仰天する・踊り上る・忘れる・(ことが)できる・暮れる」などがある。

次に、「極限状況に極めて接近した程度を表す」という「ほとんど」の用法では説明できない例を見てみよう。この場合には、「ほとんど」は、主体や対象あるいは行為の相手の総量を基準値としてその総量に極めて近い数量をとりだして表現することにある。

⑤⑭ 両全集に収容された小説は、ほとんど山本自身が撰択したものだった。(艶書321)

⑤⑮ 私はこれまでの生涯を、ほとんど犬たちといっしょに過して来た。(日々49)

⑤⑯ 部屋は物置か、女中部屋に使うものだった。彼はそこへ住みつこうというのだった。面会はほとんど断っていた。(町71)

⑤⑰ 日本人観光客が多く、特にその若い女性たちの服装の立派なことは人々の目を惹く。これらの服装にはほとんどフランスやイタリアのメーカーのラベルがついているものであろう。(オリ313)

これらの文では、今まで見てきた「ほとんど」と異なり、「ほとんど」に下接する語の中に基準値となりうる極限状況設定語としての性格を持つ語が表れていない。先行語の中の複数性を暗示する語が、その総量の枠組みを設定するものとして働き、それに「ほとんど」が結び付いている。つまり、「ほとんど」は、ここでは、基準値となる総量の枠組みを示す語を先行詞とし、その中の部分量をとりだてる機能を果たしているわけである。1. に挙げた②④⑥もこの用法に該当する「ほ

とんど」である。

また、この用法の「ほとんど」は、相対性を持つ形容詞「美しい・大きい」などとも、極限状況を表す限界値をその意味に持たない名詞述語とも、同一文中に共起することができる。

⑤⑧ 人文科学や社会科学の文章は、(中略) 長らく、ほとんど生硬な翻訳文体 (翻訳18)

⑤⑨ 本や文章などを発表していったとき、表面に表れるのは、ほとんど賛成意見である。

(翻訳209)

総量の枠組みは、必ずしも「は・も」によるとりたてを必要とするものでないことは、②④や⑤⑥の例が示している。また、総量の枠組みを示す語＝先行詞は、「ほとんど」の表れる同一文中にばかり表れるのでもないことが、以下の例に明らかである。

⑥⑩ 旅館に残っている同氏のスーツケースなどの内容物をとりだしたところ、ほとんど着替えの衣類や洗面具のようなものばかりで、(ゼロ184)

⑥⑪ 彼女の年収は京子ちゃんより、ちょっぴり少なく七百十四万円である。彼女の場合、映画のほうは、それほど多くはないようだ。ほとんど、舞台とラジオ、テレビの仕事で稼いだものであろう。(国研カード63037-77)

前々文に表れた総量枠を基準値として「ほとんど」がその中の総量に極めて近い数量をとりたてているものである。「ほとんど」が、一文の枠を越えて他の文にある基準値と結び付く用法は、今まで見てきた「ほとんど」にはない用法である。

さらに、先行詞を持たない「ほとんど」もある。

⑥⑫ オーバーの色は、明るく冴えた蘇芳色がかった赤で、この色がたいそう目立ったそうです。というのは、この辺では、ほとんど土地の人ですから、よそから来た人は目をひくんですね。(ゼロ192)

⑥⑬ ベンソンでしょう。捕えましたとも。ほとんど白状しましたよ。(国研カード53060-65)

これらの文では、先行詞は文脈から推定しなければならない。先行詞と照応形の関係で指摘される推論照応のような用法である。これに類した例に、「ほとんど」に先行する文に述べられた内容全体が、文を組み立てなおされて先行詞になるというものがある。

⑥⑭ 「しりごみ」という名詞形は今でも普通に使われ、しかもほとんど「しりごみする」と用いるから…… (国語134)

こうした「ほとんど」については、照応現象の一つとして別に考えてみる必要がありそうだ。

ところで、「ほとんど」の後続部分に基準値となりうる語が複数表れる場合には、「ほとんど」の下接語が「ほとんど」と優先的に結び付くことを、②⑨②' で見た。用例①では「ほとんど」の後続語の中に基準値となりうる語が一つしかない場合で多義的解釈が起こりうるというものであった。なぜその多義性が避けられないのか、この場合の構文上の特徴を次に見てみよう。

①では、「ほとんど」が総量規定の先行詞と結び付く可能性を①-a で示したが、それは、次のような文が①に先行していることが理由として考えられる。

①' というのは、従来日本の医者、患者の話の聞いてその要点を限られた数のドイツ語で記載することが習慣になっていたからである。ドイツ語としては極く日常的な語も、日本の医者の手にかかるとほとんど学術用語同然の扱いを受けた。

ここでは、「ドイツ語」を限定する語句「従来日本の医者が、患者の話の聞いてその要点を記載することが習慣になっていた限られた数のドイツ語」がある。それは、「ドイツ語」一般ではなく、「日本の医者が患者の話の聞いてその要点を記載するときに用いるドイツ語」である。その「ドイツ語」の総量の枠組みが明確に規定しようという前提のある場合には①-aの解釈が選ばれるが、総量の枠組みが明確でない場合には、①-bの意味が選ばれるということのように思われる。

⑥ アナーキズムの唱導者は、タバコも酒もコッフィもいけない、女郎屋に上るなどは言語道断であり、組織から金をもらってはならない、汽車は三等……、これらの戒律はほとんど清教徒のそれを思わせる。(オリ67)

この文もその意味で「これらの戒律」の総量の枠組みが明確でないために（「戒律」の例がいくつか述べられているに過ぎない）、「ほとんど」に下接する「清教徒のそれ（戒律）」を「似かよい」の対象としてその基準値に「ほとんど」が結び付いた解釈が優先的に選ばれたものと思われる。また、1.の㉔「今朝洗濯した服はほとんど濡れている」の「ほとんど」は、「濡れている」がこの文では基準値になりえないこと<sup>(注6)</sup>と総量規定の枠組みが明確なことから、数量を表すとの解釈が得られるのであろう。つまり、「ほとんど」が表れる文に述語動詞と格関係にある主体や対象などの文成分が複数性を暗示して存在するとき、そして、その総量の枠組みが明確に設定されている場合には、「ほとんど」は数量を表す。

しかし、総量を基準値として設定することも可能で、しかも「ほとんど」の後続語の中に上で見てきたような基準値がある場合には、依然として、文の多義性は避けられない。

⑬⑭の例や、

⑥ 商売のほうはほとんど番頭の山口にまかせきりである。(雑草257)

⑦ 私は今のところ、言葉拾いからカードを作り、カードの配列に至るまではほとんど一人で行っているから、(国語58)

がその例である。

## 2-2. 否定文に表れる「ほとんど」

否定辞「ない」は肯定度ゼロとして基準値になりうる。非存在を意味する「ない」「いない」はその典型と言える。

⑧ 四十六年、本格的な学習に取り組んだ。老人問題についての手引書はほとんどなかった。(毎日12/09/84)

⑨ 「あとずさり」「あとしざり」及びその動詞形はほとんど数の上で差はないが、「あとしざり」は明治に多く、「あとずさり」は昭和に多い。(国語196)

⑦⑩ イサベルと私は、ほとんど個人的なことは話し合ったことがなかった。(ビバ174)

⑦⑪ ……というような仕事をした人は、私以外にほとんどいなかったように思う。(翻訳206)

「ない」に「なる」が結合した「なくなる」の形に「ほとんど」が結び付いて用いられることも多い。

⑦⑫ ここまでやれば、暗譜は一応、冒険でなくなる。空で書けるかどうかは別にして、インチキ性、うさんくささも、ほとんど無くなる。(楽譜144-145)

これも、「ほとんど」が「なくなる」の中の「ない」に結び付いたもので、非存在というゼロ値を基準値にしている点では変わらない。

動詞の「ない」形による否定文の中に表れる「ほとんど」の場合は、「ない」に結び付く「ほとんど」と結び付かない「ほとんど」がある。この結び付き方のちがいは次のように表すことができる。

A. 私は若いころ、本をほとんど読まなかったが、今では、この部屋にある本はほとんど読んでいる。

B. 私はこの部屋にある本をほとんど読んでいない。

C. そのパーティーに教師はほとんど行かなかった。

A, B, Cの文を比べてみると、肯定文中に用いられた「ほとんど」の場合と同様、否定文に表れる「ほとんど」も、先行詞と結び付く場合のあることが分かる。

肯定文に表れる「ほとんど」が先行詞と結び付く場合のルールをもう一度確認すると、述部の動作・出来事の主体あるいは対象などの複数性が暗示されている場合には、その総量を示す枠組みが基準値として設定され、「ほとんど」はその総量を示す語を先行詞としてこれに結び付き、その特定された総量の中から、「総量に極めて近い数量」を取り出して表すということであった。

「知らない」の場合を例にそのことを観察してみよう。

D. 私は、その会議に出席している人達をほとんど知らなかった。

E. 私は、その会議に出席している人達のことをほとんど知らなかった。

上のルールをD, Eに当てはめてみると、Dでは、述部「知らない」の対象が特定できることから、その総量の枠組みを設定することが可能である。そのため「ほとんど」は線で示したような結び付き方をして、数量を表す。その結果、Dは、『その会議に出席している人達の中に私が知っている人達はほとんどいなかった』すなわち、『その会議に出席している人達の中のほとんどは私が知らない人達だった』の意味解釈が行われるものと思われる。一方、Eにおいては、述部「知らない」の対象となる事柄を特定することが不可能なために<sup>(注7)</sup>(対象の内容についての認識ができないために)総量の枠組みを設定することが不可能である。従って、その総量の枠組みを設定する先行詞として機能しうる語がないために、「ほとんど」は同一文中のもう一つの基

準値たる「ない」に結び付くことになる。Eは『その会議に出席している人達について私が知っていることはほとんどない』という意味解釈となる。Dに見られるとりたての意味を持たず、従って、本節の最初に挙げた非存在の概念に結び付く「ほとんど」と同じ働きをしている。

次に挙げるのが、そうしたとりたてられるべき総量を表す先行詞を持たない文の例である。

- ⑦③ じぶんは外で家内が何をしているのか、ほとんど知らない。(渦335)
- ⑦④ 御承知だと思うが、僕はまだ事業の内容をほとんど知らない。(朝顔289)
- ⑦⑤ お清に対しては彼は気持ちの上の責任は殆ど感じなかった。(小僧242)
- ⑦⑥ この夢で眠りがやぶれた時は、夢をちゃんと覚えていた。……(中略)……しかし夕方には、ほとんど覚えていない。(山35)
- ⑦⑦ 豆子ではトマトなど私はほとんど食べなかった。(オリ102)
- ⑦⑧ 二人はそれを目標に歩いた。人はほとんど通っていなかった。(渦162)

いずれの例でも総量・総体を設定できる語がなく、Dに見られるような意味解釈ができない。

先行詞を持つ「ほとんど」の例には次のような文がある。

- ⑦⑨ ……自由に価格をつけることのできる非再販本も流通できるようになった。が、現実には非再販本はほとんど一般の本の世界では動いていなかった。(毎日17/09/84)
- ⑦⑩ 引用冒頭の文は六〇字ほどの長さがあるが、……(中略)……あとはほとんど三〇字にも満たない文がなっている。(名文96-97)

「一般の本の世界で動いていなかった非再販本」「三〇字にも満たない文」の総量の枠組みが特定できる例である。

さて、否定文中の「ほとんど」は、上の⑦⑨⑩の例で見たように、述語動詞の格関係に関わるレベルで働く場合には、肯定文中の「ほとんど」と同じように、数量を表すが、動詞との格関係を持つ文成分の中に総量枠組みを特定する語がない場合には、時間量や頻度に関わるレベルで作用する。

- ⑦⑪ 禎子は昨夜はほとんど眠っていない。(ゼロ178)
- ⑦⑫ 彼は……(中略)……連日の奔走で労(つか)れきっていた。ほとんど家へ帰らず、役所で泊まるにも着たままであった。(朝顔186)
- ⑦⑬ 二年間ほとんど休まず傍聴し、(毎日14/06/85)

しかし、これらの文で「ほとんど」は「ない」を示す事態成立の肯定度ゼロという基準値に極めて近い程度であることを表しているのみである。時間量に関わるゼロ値なのか、頻度に関わるゼロ値なのかは「ない」が文中で何を否定するかによって決定されるものである。

## おわりに

以上、「ほとんど」が結び付く基準値の実態を整理しながら、「ほとんど」が、程度の判断を表す限りにおいては話者の主観的表現であるが、それはあくまでも事柄の実現のされ方のレベルで

の主観的測定の範囲内のものであることを見てきた。限られた用例の中で「ほとんど」と共起する極限状況設定語を手がかりに考察を行ったのみであり、共起制限にひっかかるような例は、当然用例の中に現れて来ず、また、副詞の構文的意味の観察に不可欠の動詞の例も数少ないものである。従って、今後の課題としては、「ほとんど」のように文中で結び付く相手の語の性質によってさまざまな働きをする副詞を軸に、動詞の彙的・文法的意味による分類を試みつつ、副詞の個別的な意味を明らかにしていくという面からの作業が残されている。

(注)

- 1) 工藤の場合「共起」という語は、同じ文中に言語形式として共存するという意味で用いられている。花井では、この「近づきの程度」を表す場合の「ほとんど」(など概略表現副詞群)の働きを「修飾」という概念でとらえている。
- 2) 「ばかり」は上限も下限も設定せずに種類の取り立てを行うために機能する語のようである。  
「ここにいる人たちは全部若い人ばかりだ」／×「ここにいる人たちは全部若い人だけだ」  
×「そんなことが出来るのは若い人ばかりだ」／「そんなことが出来るのは若い人だけだ」  
接頭辞「不」の場合には必ずしもすべて「無」の持つ「ゼロ」のような極限値を表す語を作るわけではない。(「不親切・不便」など)
- 3) 工藤1983の用語による。
- 4) 工藤1982は「あたかも・まるで・ちょうど／いかにも・さも」を「叙法副詞」の中に位置づけている。
- 5) 「ほとんど」と「すっかり」の共通性を示す例として、  
「工事がすっかり完成した」 ×「彼はその事故ですっかり死んだ」  
「工事がほとんど完成した」 ×「彼はその事故でほとんど死んだ」  
があるが、更に検討が必要である。
- 6) 「今朝洗濯した服はほとんど乾いている」で「乾く」が主体の状態変化を表すことと対比すれば「濡れる」だけを見て動詞の意味づけを行うことの不可能さが分かる。
- 7) これは、動詞「知る」の意味のちがいということができようか。例えば、「あの人を知ってるか」「ああ、知ってる」「どんな人だい」「いや、それは知らない」に表れる認識のレベルのちがい(単に対象が認知できるという意味の『知る』であるのか対象の内容についての認識を持っているという意味での『知る』であるのか)に関わることであろう。

出典一覧

- 板坂 元 『ああアメリカ』講談社現代新書(ああ)  
岩城 宏之 『譜楽の風景』岩波新書(楽譜)  
川端 康成 『山の音』新潮文庫(山)  
志賀 直哉 『小僧の神様・城の崎にて』新潮文庫(小僧)  
田辺 厚子 『ビバ! メキシコ』講談社現代新書(ビバ)  
辻 邦生 『見知らぬ町にて』(町)  
中村 明 『名文』(名文)  
堀田 善衛 『オリーブの樹の蔭に』集英社文庫(オリ)  
『情熱の行方』岩波新書(情熱)  
『日々の過ぎ方——ヨーロッパさまざま』新潮社(日々)



毎日新聞 朝刊14版（毎日新聞大阪本社）  
 松井 栄一 『国語辞典にない言葉』南雲堂（国語）  
 松本 清張 『渦』新潮文庫（渦）  
           『雑草群落（上）』文春文庫（雑草）  
           『ゼロの焦点』新潮文庫（ゼロ）  
 水谷 修 『日本語の生態』創拓社（生態）  
 柳父 章 『翻訳学問批判』日本翻訳家養成センター（翻訳）  
 山本周五郎 『朝顔草紙』新潮文庫（朝顔）  
           『艶書』新潮文庫（艶書）  
           『花勾う』新潮文庫（花）

（記）「ほとんど」の用例に関しては、国立国語研究所の宮島達夫氏のご厚意を得た。ここに記して謝意を表したい。

#### 参 考 文 献

- 石神 照雄（1977）「連用修飾の構造—動詞文における属性の立体的表現—」（『国語学研究』第16集 東北大学文学部「国語学」刊行会）  
 ———（1978）「時の修飾成分」（『文芸研究』第88集）  
 工藤 浩（1982）「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」（国立国語研究所『研究報告集(3)』秀英出版）  
 ———（1983）「程度副詞をめぐる」（『副用語の研究』明治書院）  
 久野 章（1983）「否定辞と疑問詞のスコープ」（『新日本文法研究』大修館書店）  
 小矢野哲夫（1982）「副詞の意味記述について—方法と実際—」（『日本語・日本文化』第11号 大阪外国語大学留学生別科）  
 ———（1983）「副詞の呼応—誘導副詞と誘導形の一例—」（『副用語の研究』）  
 新川 忠（1979）『副詞と動詞とのくみあわせ』試論（『言語の研究』むぎ書房）  
 仁田 義雄（1983 a）「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」（『日本語学』Vol. 2 10月号）  
 ———（1983 b）「結果の副詞とその周辺」（『副用語の研究』）  
 花井 裕（1980）「概略表現の程度副詞」（『日本語教育』42号）  
 原田 登美（1982）「否定との関係による副詞の四分類—情態副詞・程度副詞の種々相—」（『国語学』第128集）